

山と博物館

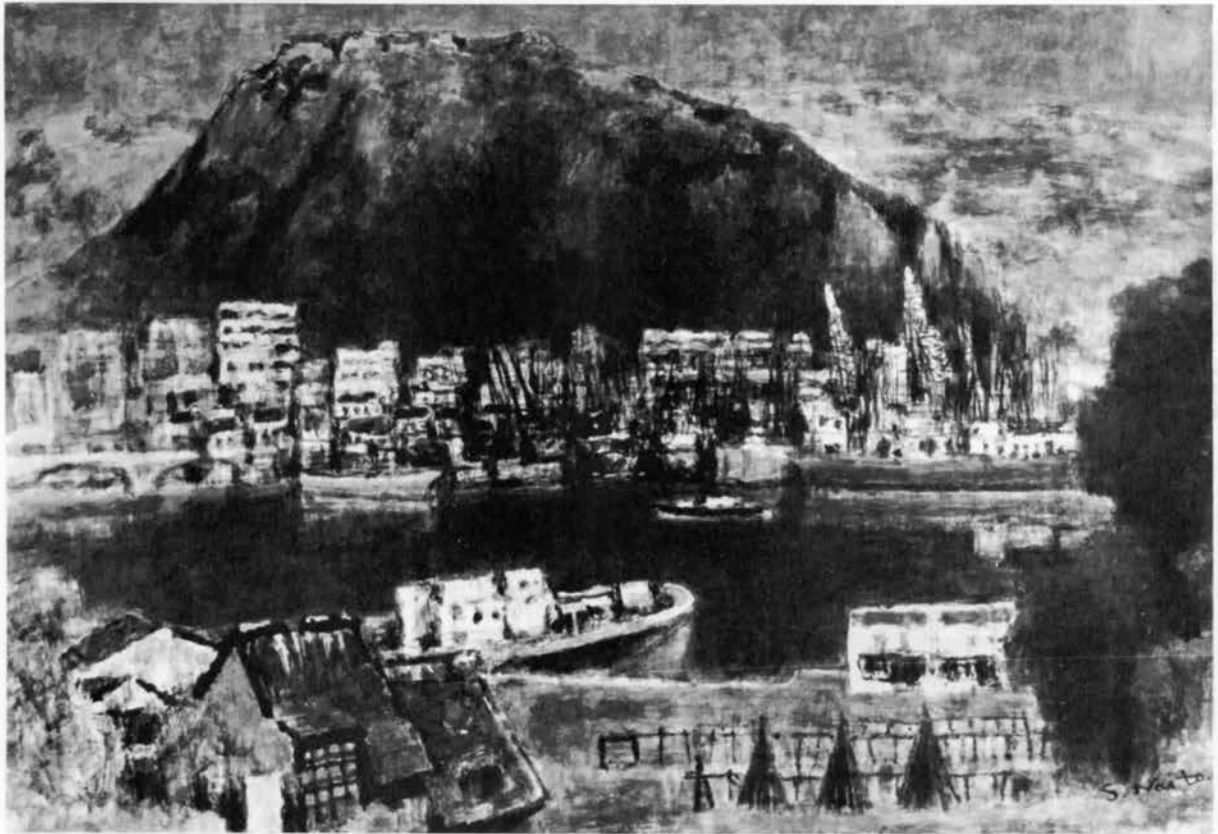
第30巻 第7号

1985年7月25日

大町山岳博物館

特集

日本水彩画会 長野大町展 (期間7月20日～8月20日)



山 姿 寝 内藤 秀因

社団法人、日本水彩画会

長野大町展の開催

大町山岳博物館の新装なり、山岳博物館としての本来の諸展示室に加えて、特別展示室、教室、研究室が整った時点で、これらの室を利用して、価値ある、「特別催し」を、やってみたらどうか、という声内外から起ってきたのは、当然の成り行きといつてよい。

山岳博物館に、見学者が集中するのは、夏である、この一ヶ月に、二万人以上の入場者がある。これは、安曇野の名所「礫山館」につぐ入場者数である。

それこそ、全国から、夏に、北アルプス山麓に自然と、涼を求めて来た人々の、入場である。

日本で、唯ひとつという、山岳博物館の、北アルプス一帯の登山、スキーの歴史、動植物についての展示は、全国的にみても、かなりユニークであるが、この立地条件下でこれだけの入場者を集めているのは、館員が、それぞれ専門的技量を持ち、意欲的に対処し、訪れる見学者の口こみもあって、評価を高めつつあるにちがいないのである。

しかし、館を訪れる、人々してみれば、館の展示とは別に、山岳、山湖、森林、岳の花、野の花、石仏、民家、清流……、これらとかかわって生きている人々が、織りなす自然の景に、没入しつつ、夢や、詩や、絵心を感じとっているのである。

これへの対応のひとつが、山岳博物館でのここ数年の夏期における、特別催しとしての「美術展」なのである。

全国的な、一流展をという声で、今年、創立以来七十三年という、日本最大の水彩画団体である、日本水彩画会の方々の、深く、温かいご厚意で、共催できる運びとなったのである。大きな喜びである。

日本水彩画会の歴史

大正二年(一九一三年)四月、水彩画では世界で最高レベルの、イギリスの水彩画会R・W・Sより、広い組織にし、日本の水彩画の発展を期して、画派、集団を越えて、日本の水彩画家に広く呼びかけて、日本水彩画会は組織された。

この創立は、今も、日本画壇の大勢力になって来ている。二科会、光風会と前後している。画派の結成では、最も古い歴史をもつ団体である。

この創立に当たって、中心になって日夜、尽力されていた、日本水彩画壇の第一人者であった、大下藤次郎(大町展に風景、一点出陳。後に、日本で最も権威のある美術雑誌「みづゑ」の創刊もした)は、四十三才の若さで急逝され参加できなかった。



六月の穂高岳 大下藤次郎

創立会員は、石井柏亭、石川欽一郎、南薫造、白滝幾之助、真野紀太郎、水野以文、矢代幸雄、中沢弘光、正宗得三郎、倉田白羊、篠原新三、森田恒友、板倉賛治、戸張孤雁ら



脇息に倚る女 石井 柏亭

に丸山晩霞、小山周次など、長野県出身者もいれて六十四人であった。

これらの画家は、日本の水彩画壇を背負うに足る人々で、大画家になっている。

第一回展は、六月に、竹之台陳列館で行われ、四百八十八点が展示されたという。

戦中から、戦後にかけて、松本浅間温泉に疎開されていて、信州美術会の創立に当たった、信州から多くの美術家を育てられ、芸術員会員、一水会創立会員でもあった、石井柏亭が、日本水彩画会の創立、運営に尽くした力は大きい。

戦後の名作、梓川の清流から、アルプスを配した名作「山河あり」は、終戦直後のもので……「国破れて、山河あり……」の詩に、想いはせたものとされている。(大町展に初期の作品を一点出陳)

大町附近を、描いた作品も、かなりある。篠原新三も、信州に居を置き、長野を中心に活躍した。

大正年間に、加入した画家たち

日本水彩画会の創立と、若い水彩作家を養成するために運営された、水彩画研究所は人氣があり、多くの青年達が学んでいる。

石井柏亭、白滝幾之助、小山周次らが、水彩研究所の中心だった。

大正年間に、三宅克己、古賀春江、石井鶴

三、万鉄五郎、不破章、中西利雄、平塚連一新道繁、小山良修、富田通雄らが新しく、加入していった。

長野県出身では、中川紀元、白山卓吉らが新会員になっている。

これらの人々は、日本水彩画会だけでなく、広く、芸術の分野で歴史に残る、足跡をそれぞれ残されているのである。

このうち、現在、お元気で健筆をふるっておられる小山、平塚、富田のうち、小山、富田、お二人の作品が、大町展に出陳される。

余談だが、学校教育の中で、美術科の学習をした者なら、ここまでに、あげてきた、画家たちの作品の載った、教科書は必ず、使用してきているはずである。

これらの人々の中に、彫刻家がいったり、油絵画家になったり、版画に進んだりもしているのだが、その、座右に水彩画を配し、描いておられるのである。

これも、余談だが、ある著名作家と写生行を共にした時、水彩画を、武士の帯刀の、小刀にたとえておられる説明に感じ入ったことがあった。

先生は、その日の写生では、えんびつで描き、淡い彩色をされておられたが、その確かなデッサン力と、淡彩色の美しさに、ほとほと感じ入ってしまったことだった。

先生は、水彩作家としてでなく、彫刻家として、日本の存在であられた。

今日、特に戦後、経済生活の安定につれて洋画の本道は油絵であって、この画材が一段上のよう感じとって、「ねこも、しゃくしも油絵」と、なってしまうているのは、どうしたことかと思っている。

学校教育の場で、水彩えのぐを多用することから、「学童の使うもの」というような、イメージから、きている部分もあるのかもしれない。

昭和初期に加入した画家たち

昭和に入ると、いまの上野公園にある、東京都美術館の前身、旧東京府美術館が使えるようになり、絵画を発表する場としては、空前の良い会場となった。

日本水彩画会だけでなく、その後組織された、画派も含めて、この壮大な美術館は、有効な発表会場となった。

日本水彩画会の、昭和二年(一九二七年)第十四回展は、この会場で四百一十一点陳列されて行われている。



山 湖(木崎) 不破 章

このころは、会場も広く、画家の数も少く絵も大きいものでも、現在の出品画の半分くらいのものであったから、創立会員や、洋行帰りの画家などの特別陳列(十数点)などを行ったり、している。

懇親と、作画研究をかねた、写生旅行などもよく行っている。昭和四年(一九二九年)、第十六回展で、

はじめて、受賞者を決めている。
日本水彩画会賞、二名。その他の賞を三名に、そして、出品画の一部を、全国巡回展に貸している。

それぞれの地方の画家や、画家を志す人々、絵画愛好者には、すばらしい催しだったにちがいない。カラー印刷や、テレビのない時代だったから。

昭和十年代までに、新しく加入した会員としては、斎藤大、牧野正吉、春日部たすく、松本慎三、野沢潤二郎、内藤秀因、山口進、繁野三郎、畦地梅太郎、脇田和、荻野康児、小堀進、細島昇一、岡田正二、荒谷直之介、三岸節子、相沢光朗、山本不二夫、漆畑広作などである。

昭和十五年(一九四〇年)、新しく、会友制度を発足させ、この年に十五名を推薦している。



富士見回想 小山 良修

このころから、戦時色がこくなくなり、画壇も戦争協力となり、従軍作家なども多く出たが、作画活動も、思うにまかせず、発表の場もなくなり、生活に追われ、敵機に追われ、若い画家たちは、筆を折って、戦線にかり出されていた。

この年、戦後、日本水彩画会とともに、大

きな勢力になる、水彩連盟が、荒谷直之介ら八人によって発足している。

この年代の画家には、まだ健在の方々がかなりおられる。

今、大町展には、牧野、繁野、野沢、内藤、漆畑らの作品が出陳されるが、心からお礼申し上げるものである。

日本水彩画会の結成と、展覧会と、所属画家たちが、大正から今日まで、日本の水彩画界を背負い、守り、育ててきたと言ってよいのである。

戦後の日本水彩画会

昭和二十年(一九四五年)八月、終戦となるや、日本水彩画会も活動をはじめた。臨時事務所を小山周次宅に置いている。

戦災、疎開などで、消息不明の人も多く、東京及び、周辺地居住の人たちが集まって、委員を選び、今後の活動への協議をしている。

委員は、相沢光朗、不破章、石井鶴三、石川達三、春日部たすく、小山良修、小山周次、水野以文、竹内梅治郎、富田通雄、山中仁太郎ら二十名であった。

この年、長年、日本水彩画会及び、日本の水彩画壇に貢献されてきた、中沢弘光、南薫造、石井柏亭、真野紀太郎、石井鶴三らを、名誉会員に推薦しているが、真野、石井鶴三は辞退している。

昭和二十年(一九四五年)、昭和二十一年(一九四六年)は、戦後の混乱期にあり、大きく公募展としては開催できないでいるが、二十一年の七月に、日本橋三越で作品展を開催した。出品作は八十六点であった。

この時の委員たちが、戦後の日本水彩画会を背負い守って、今日の一大盛況時代を迎えることになっているのである。

昭和二十二年(一九四七年)に、本来の公募展の形で、日本水彩画会展を催し、研究所



早春 石川 達三

も開き、写生会も行い、作品研究会なども意欲的に行ったので、急速に、水彩作家が増し鑑賞者も多くなっていた。

この年の日本水彩画会展で、戦後をはじめた日本水彩画会賞を、山森元亀に、渡部文雄、仁戸田秀吉に賞状を与えている。

戦後初の新会員は、藤田薫、山森元亀、渡部文雄ら五名であった。

この年、山本不二夫が主任になって、機関紙「日本水彩」が、創刊され、今日にいたっているのであるが、機関紙は、地方にいる会に所属している作家との結びつきを強める点での役割りは大きいのである。

昭和二十四年(一九四九年)、美術団体の組織としては例の少ない、地方支部組織を認め、水彩画の振興と普及をはかる方途を講じているのだが、今日、全国には五十六の支部があり、それぞれ、支部長ほかの役員を置き中央の日本水彩画会展に向けて、互の研さんの外、支部単位での、作品展や、写生会、懇親会などを行っているが、考えようによっては、これが、日本水彩画会の屋台骨を支える主柱のひとつになっていることも事実である。



南スペイン風景 阿部 広司

長野県内でも、長野支部が出来、つづいて松本支部が出来、上田支部が続き、最後に諏訪支部が発足している。

かなり、大きな県でも、一県一支部のところも多い中で、一県内で四支部はかなりのことになる。

しかし、これだけ、水彩画人口も多く、この文の中にも出てくるが、石井柏亭、丸山晩霞、小山周次、篠原信三、白山卓吉らの先人たちがおり、戦後でも飯島公夫、高島仁などの先輩がおり、水彩画の発展と、振興に尽くしてくれたことによるのである。

いま、東京を除く地方で、最も水彩画レベルが高く、水彩画家が多く、しかも活発に動いているのは、広島と、長野県である。

日本水彩画会だけでみても、会員、会友数においても、(現在、会員二十五名、会友十一名、計三十七名)広島とほとんど変わらない、毎年日本水彩展に於ける一般の入選者数では、やや見劣りするものの、受賞者数では、近年はしのいでいる状況である。



早春白馬岳 大和屋 巖

厳しい審査をへて、一般出品者の入賞者が多いということは、近年において、会員、会友に推薦される可能性が強いと言えるから、さらに増加していくと考えてよいのである。

戦後生活の落ち着きに比例して、水彩画人口も増え続け、日本水彩画会展への出品者も増し出品作品も、年々、大きくなっていく……。当然、起ることは、会場の広さに限界があるのだから、入選が厳しくなるということ、無制限に大きくなる作品に歯止めをかけるということになる。

受賞作品も、多くはなっているが、日本水彩画は比較的厳しく制限しているため、一般出品者が、入選し、入賞することは、近年ますます難事になってきている。

前年の入賞者が、翌年は落選するということが起るのである。

昭和二十五年(一九五〇年)ごろから、先達の物故作家の遺族からの寄附金による、賞が設定されるようになり、今日に続いている。



カルカッタの古寺 石沢 清

が、受賞者になれば、大きな名誉である。

昭和三十三年(一九五八年)から、文部大臣賞も制定され、昭和五十九年(一九八四年)には、総理大臣賞が設けられた。

鑑、審査員も、従来はほとんど東京近在の人々が当たっていたが、近年は、地方の声を反映するようになって、地方からも選出されるようになってきている。

それから、戦後は、地方で写生会が多くなっている。昭和二十六年(一九五一年)に信州新野で、三十二年には小諸で、三十六年は戸隠で、三十八年には湯の丸、四十五年は湯田中、四十九年は木島平、五十三年は乗鞍、五十五年海野だった。

日本水彩画会主催の講習は、夏季に東京で行うことが、ほとんどであったが、昭和三十三年(一九五八年)にはじめて地方会場として白馬山麓で行った。白馬中学校の小講堂を借り、講師は石井鶴三、水野以文、三上知治が当たった。この年の写生会も白馬で行い、四十二年と、四十八年も写生会を白馬で行った。これらの催しがあれば、その地区からの参加者もあり、したがって、水彩を志する人の数を増すことにつながっているのである。

今年の日本水彩画会展は、七十三回展であった。六月七日〜十八日まで、東京上野の東京都



安曇野 残光 征矢野 久

美術館で行われた。出品総数は九〇七点であった。審査員を除く、会員、会友に与えた賞は、総理大臣賞、文部大臣賞以下八点、一般出品者には、日本水彩画会賞以下十四点に賞を贈った。

現在、五十六の支部があり、一般出品者を含めて、ほとんどが、地方支部に所属している。(但し、東京都は除く)

現在、会員が二五八名、会友が一五〇名おり、これらの人は、無鑑査になっている。

今年度、一般の部の入選者は五二〇名ほどであった。

近年、水彩画材もかわり、従来の水彩えのぐでなく、不透明えのぐを使用する人も多くなっている。

アクリル系の強いえのぐで、布キャンパスに描いた作品も増えている。

また、写実的作品とは反対に、構想し、構想した、抽象作品、幻想作品もかなりあり、本展でも、それがみられる。

特別出品、三点、(石井柏亭、大下藤次郎、不破章)。

日本水彩画会の監事、参与の作品、五点。

理事の作品、十四点。

評議員の作品、十七点。

受賞作家の作品、十一人。

長野県関係会員、会友の作品、三十五点。

主催協力の松本支部の作品が加わって、合計 約一〇〇点になる。

これだけの、名実ともに一級作品展を地方の小都市で催した例は、極めて少ない。

一人でも、多くの人に鑑みていただきたいのである。

付記

日本水彩画会の前理事長で、一水会常任委員、日展会員でもあった、不破章画伯は、生前、信州、特に北アルプス山麓を愛し続けたよしみで、くらは夫人は、生前に、公募展その他に出陣した、代表作二十三点を、大町市に寄贈された。

これらの作品は、特別催し以外の時には、本山岳博物館に常陳してあります。

文中、敬称略させていただきました。お許しください。

(石沢清 大町市、日本水彩画会評議員、審査員・一水会会員。日本水彩画会長野大町展運営委員)

(注) 掲載写真は総て出陣作品です。

山と博物館 第30巻 第7号

発行所 長野県大町市 一九八五年七月二十五日発行 TEL22〇〇二二

印刷所 大町市 山岳博物館

定価 年額二、〇〇〇円(送料共)切手不可

郵便振替口座番号(長野四)二二九九三